

令和7年度 学校総合評価

6 今年度の重点課題に対する総合評価

本校での現状を踏まえ、2項目の重点課題を設定して取り組んだ。各重点項目の目標についてはおおむね達成することができた。取組の概要と評価は下記のとおりである。

(1) 生徒が対話や協働により新しい解や納得解を見出すことができるための支援

聴覚障害の生徒も知的障害の生徒も、図や文字をホワイトボードに書いて伝えようとするなど、相手に伝わるコミュニケーション手段を使ってやり取りする姿がみられるが、自分の考えや必要な支援を相手に分かりやすく伝える力、自分の思いと異なる場面で相手の立場や物事の経緯に耳を傾ける力に弱さがみられた。そこで、生徒に自分の考え方を問うアンケートを実施したり、自己理解を深めるための支援方法を検討し、作業日誌の様式を見直したりした。アンケート結果をもとに自分とは異なる考え方があることを知り、その先の自分の行動を具体的にワークシートに書いたり、作業日誌から自己評価と教師の評価の差に気づき、指導されたことを思い出し具体的に振り返ったりする生徒の姿がみられた。

(2) 聴覚障害児の在籍校（園）のニーズに沿った支援の在り方及び教育相談の充実

聴覚障害のある子供たちは早期からの継続的な支援の必要性が高く、本校は聴覚障害に関する専門的な教育・相談・情報提供を行う聴覚障害教育センター校としての役割を強く期待されている。そこで、学校と保護者それぞれのニーズに応じた教育相談のリーフレットを作成し、聴覚障害のある子供が在籍する学校（園）や関係機関を訪問しセンター校の役割や聴覚障害についての理解啓発を行ったり、教員の専門性を高めるために、教育相談部で実施している研修会への参加を呼び掛けたりした。訪問した学校では「補聴援助システムや補聴器の体験を行うことで難聴児の聞こえ方の理解が深まった」という感想があった。また、研修会を通して、「幼稚部から高等部までの縦のつながりを感じることができた」「発音について分かりやすく学ぶことができた」などの感想があり、学びを深める機会とすることができた。

7 次年度へ向けての課題と方策

- (1) 聴覚障害の生徒と知的障害の生徒の対話や協働の場面を設定し、「どうなりたいのか」「何のために」「どうするのか」から始めて、目的意識をもって発言したり聞いたりすることができるように導く必要がある。作業日誌や振り返りシートについても、生徒が自己理解を深め、学習に対する意欲を高めるツールとなるように、目的を理解した目標設定や目標に応じた振り返りを行い、次の目標や行動につなげていけるように支援方法を考えていく必要がある。
- (2) 聴覚障害は本人や周囲がその困難さに気づきにくい特性をもつため、地域の学校（園）への啓発活動は重要であると再認識した。一方で訪問相談に対して慎重な姿勢を示すケースが見受けられる。今後は県東部の特別支援学級へのリーフレットの配付や研修案内先の拡大等を通して地域との連携強化をより一層推進していく必要がある。教育相談の件数は例年どおり一定数で推移しており、本校の専門性の維持・向上が引き続き求められている。次年度以降も教育相談部で主催している聴覚障害教育に関する活動への参加を促すと共に研修内容の見直しを図り、より良い研修の場となるように取り組んでいきたい。

8 学校アクションプラン

令和7年度 富山聴覚総合支援学校アクションプラン (高等部) - 1 -

重点項目	学習活動	
重点課題	生徒が対話や協働により新しい解や納得解を見出すことができるための支援	
現 状	<p>高等部では、生徒が自己理解を深め、社会の中で自分らしく主体的に生きていくために必要な力を身に付けることを目指し、自己を見つめる学習や他者からの意見を聞く機会を設けたり、実生活に必要なコミュニケーション・スキル等が身に付くような学習を取り入れたりしてきた。</p> <p>その成果として、設定された集団学習において、聴覚障害の生徒も知的障害の生徒も、図や文字をホワイトボードに書いて伝えようとするなど、相手に伝わるコミュニケーション手段を積極的に使ってやり取りする姿、学習を通して得たことを振り返る姿がみられるようになってきた。一方で、自分の考えや必要な支援を相手に分かりやすく伝える力、自分の思いと異なる場面で相手の立場や物事の経緯に耳を傾ける力等には弱さがみられた。</p> <p>そこで、対話や協働の場面を設定することにより、自分の中に新しい考え方を見付けたり、自分とは違う他者の考え方を認めたりして課題を解決しようとするように、支援の在り方を考えていくこととした。</p>	
達成目標	生徒が自分とは異なる他者の考え方を知り、その先の行動や方策を具体的に考えることができるように支援する。	生徒が自己との対話により、自己理解を深めることができるように支援方法の検討を行う。
	具体的な行動や方策をワークシートに書く 生徒の割合 80%以上	年間5回以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の考え方を問うアンケート調査を年3回程度、高等部生徒全員に行う。 調査の結果から自分と異なる考えを知り、その先の自分の行動や方策を考えてワークシートに書く機会を設定する。 生徒が具体的な方策を書くことができるような発問や支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の自己理解が深まるように、福祉、流通、ワークトレーニングの作業日誌の様式（問いや評価基準等）を見直す。 対象生徒、事例を決めて、自己理解が深まるような問いかけ、振り返りの方法をグループで検討する。
達成度	100%	5回実施
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 1回目のアンケート調査は教員が作成した内容で行い、2回目は生徒から質問したい内容を聞き取って教員がアンケート調査を行った。1回目も2回目も実施後に集計結果を紙面で公表し生徒が結果を見て納得できる考え方やその先の行動を書くワークシートで振り返りを行った。その振り返りを踏まえて3回目の調査はそれぞれの生徒が聞きたいこと、聞きたい相手を考えて調査を実施し、調査結果を踏まえて考えたことやその先の行動を書いて提出する形とした。 アンケートの結果を見てもその先の行動を考えることが難しい生徒に対しては、担任が具体例を示したり、その先の行動の選択肢を示したりしてワークシートが記入できるように導いた。 	<ul style="list-style-type: none"> 福祉、流通、ワークトレーニング各班の作業日誌の様式の見直しを行った。どのグループでもこれまでより具体的な振り返りの記述が多くみられるようになってきた。また、教師と一緒に日誌を確認することで、自己評価と教師からの評価の差に気付いたり、指導されたことを思い出したりして、具体的に振り返りする姿がみられた。 各学習グループから一人対象生徒を決めて、事例検討を行った。観点を決めて、担当者から具体的な評価を繰り返し生徒に伝えていくことで生徒自身の目標を認識し、活動の様子を振り返る姿がみられた。
評 価	A	
学校関係者の意見	生徒の考え方を問うアンケートについて、振り返りシートで自分とは異なる考え方の生徒に対する今後の行動を書くだけでなく、「なぜそう思うのか」も考えさせることが大切である。その先の行動の意味を考えることが、生徒同士の歩み寄りや折り合いをつけることにつながっていくと思われる。	
次年度へ向けての課題	聴覚障害の生徒と知的障害の生徒の対話や協働の場面を設定し、「どうなりたいのか」「何のために」「どうするのか」から始めて、目的意識をもって発言したり聞いたりすることができるように導く必要がある。作業日誌や振り返りシートについても、生徒が自己理解を深め、学習に対する意欲を高めるツールとなるように、目的を理解した目標設定や目標に応じた振り返りを行い、次の目標や行動につなげていけるように支援方法を考えていく必要がある。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	その他	
重点課題	聴覚障害児の在籍校(園)のニーズに沿った支援の在り方及び教育相談の充実	
現 状	<p>教育相談部の業務は、就学相談、乳幼児教室、定期的な教育相談等の相談業務をはじめとして、学校見学会等の理解啓発活動、幼稚園保育園、学校等への地域支援、本校幼児児童生徒の聴力測定や補聴援助システムに関する聴覚管理等、多岐に渡る。</p> <p>中でも、乳幼児教室や定期的な教育相談の利用者数は一定で推移しており、そのニーズは根強い。地域のこども園、保育所、学校からの難聴のある子供に関する相談についても同様である。この状況から、聴覚障害がある子供たちへの早期からの継続的な支援に対する必要性が高く、本校が聴覚障害に関する専門的な教育・相談・情報提供を行う聴覚障害教育センター校としての役割を強く期待されていることが伺える。</p> <p>一方で、地域の難聴特別支援学級の現状とニーズをつぶさには理解できていないため、現状を把握し、聴覚障害に関する情報や本校の役割の啓発を推進し、連携を強化することが重要な課題と言える。また、本校の職員に対しては、聴覚障害に関する理解をさらに深め、より効果的な教育方法や支援に関する共通理解を図り、専門性の維持・向上が求められている。</p>	
達成目標	富山県東部にある難聴特別支援学級、乳幼児教室、定期的な教育相談利用者の在籍校(園)等を訪問し、理解啓発を行う。	職員に対し、研修会への参加を促し、専門性の維持・向上を図る。
	10校(園)以上	年に2回実施
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害教育センターのリーフレットを作成して、訪問先に配付し、聴覚障害教育センター校の役割について説明する。 訪問先の学校(園)のニーズを聞き取って必要な支援を整理し、ニーズに応じた適切な情報提供や支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育相談部で主催している聴覚障害教育に関する活動(きこえとことばの研修会、夏の集い等)への本校職員の参加を促し、専門性の維持・向上を図る。
達成度	10校(園)訪問	2回実施
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害教育センターのリーフレット2種類(保護者向け、教職員向け)を作成した。富山県リハビリテーション病院・こども支援センターと富山県難聴児支援センターに持参して本校の役割を説明し、連携強化を図った。 本校教育相談利用者在籍校(園)6校(園)を訪問し、それぞれの幼児児童生徒のニーズに応じた情報提供や助言等を行った。その他の学校(園)から聴覚障害理解に関する講話等の依頼が4校(園)あり、訪問して実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 7月末に実施した「きこえとことばの研修会」には本校職員26名が参加した。8月上旬に実施した「夏の集い」には6名の教職員が参加し、参加幼児児童の支援等に協力してもらった。活動の事後アンケートからは聴覚障害について「改めて学習する機会は、本校職員にとって大切だと思う」「他学部の指導事例を知ることができ、全体で共有する必要性を感じた」「難聴の幼児児童同士の交流の機会は貴重だと感じた」など、意欲的な所感が多く、聴覚障害について考える機会となったことが伺えた。
評 価	A	
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 7月の「きこえとことばの研修会」では、外部から参加された先生が相談しようと思える良い仕掛けが必要である。「夏の集い」は本人同士の交流の場を設けたことがよかった。本人の思い、生の声を知る良い機会である。今年度参加された方が毎年継続して参加し、その輪が広がっていくように取り組んでほしい。 地域の学校(園)で学ぶ難聴児が、困っていることは何か、我慢していることはあるのかなど、抱えている思いを子供たちからうまく引き出し、地域支援に生かしてほしい。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害は本人や周囲がその困難さに気付きにくい特性をもつ。今回の取組を通じ、地域の学校(園)への啓発活動の重要性を再認識した。一方で、訪問相談に対して慎重な姿勢を示すケースも見受けられる。今後は県東部の特別支援学級へのリーフレットの配付や研修案内先の拡大等を通して地域との連携強化をより一層推進していく必要がある。 教育相談の件数は例年どおり一定数で推移しており、本校の専門性の維持・向上が引き続き求められている。次年度以降も教育相談部で主催している聴覚障害教育に関する活動への参加を促すと共に研修内容の見直しを図り、より良い研修の場となるように取り組んでいきたい。 	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)